

マイ・フェイヴァリット・キャッチコピー

いま自分が犯した行為がどんなものだったかを認識するのに、しばらく時間が掛かった。私はほんの数秒前まで、無意識のなかにいたのだ。

意識を取り戻し、部屋を見渡した。組み立て式のスウェーデン家具でほぼ統一された8畳のワンルーム。まるでその部屋のシンボルであるかのように設置された25型の液晶テレビは砂嵐を映す。スヌーピーとウッドストックの描かれた掛け時計は午前3時を少し過ぎたことを知らせる。外国のどこかの町のモノクロ写真が印刷されたカレンダーは6月を示している。その隣の壁にはいくつかの小さい穴が小動物の足跡のように開いていて、その隣には今はインテリアとしてこの部屋の一部になっているダーツの的が掛かっている。フローリングの上にはフランフランのシングルなカーペットが敷かれている。その上には今週号のアンアンが片付け忘れられていて、悪戯好きの子犬に噛み千切られたように表紙が大胆に破かれている。清潔感のあるシングルベッドは、少し前まで横になっていた私の形を微かに残す。その横にある簡単な収納ラックには、マザー・グースの文庫本の詩集が1冊とアロマキャンドル、ヴィヴィアン・ウエストウッドのシガレットケースとカルティエのライター、ライムグリーンの灰皿にはバージニア・スリムの吸殻が2本、ほとんどぬいぐるみみたいなスヌーピーのティッシュボックスが置いてある。その部屋はある一点を除けば、いつもとさして変わらない私の部屋だった。

私の前には、男がいた。その男の心臓を私の握ったダーツの矢が突き刺していた。

私はその男のことを知っている。いや、あるいは知らなかったのかもしれない。数週間前まで、私たちは恋愛関係にあった。男はコピーライターだった。突然浮かんだアイデアをサインペンで手のひらにメモするのが癖だった。

「彼が常連客のミチルさんだよ」

十六ヶ月前、三宿のダーツバー。

そこで働き始めてまだ間もない私に、オーナーは教えてくれた。  
それが彼との出会いだった。

「よろしく」と笑った彼の手のひらが不意に目に入った。

そこには黒いインクで文字が書かれていた。

へこんにちは。または、さようなら。く

「もっとチカラを抜かないといけないよ」

十五ヶ月前、三宿のダーツバー。

彼のダーツはプロ級の腕前だった。

彼は、初心者の方に優しい口調で教えてくれた。

「こうやって握るんだよ」とダーツを握った彼の手のひら。

そこには黒いインクで文字が書かれていた。

〈チカラを抜かないといけないよ。〉

「部屋のインテリアにならなきやいいけど」  
十四ヶ月前、三宿のダーツバー。

私の誕生日。スタッフと常連のお客さんがお祝いしてくれた。

彼はとつてもオシャレなダーツのセットをくれた。

「壁には穴を開けないようにね」とジョークめかしに呟いた彼の手のひら。

そこには黒いインクで文字が書かれていた。

「またひとつ、死に近づいている。」

「面白いとは言い難いけど、僕は好きだったかな」

十二ヶ月前、西麻布のダイニングバー。

彼に誘われて、一緒に映画を観て、ディナーも過ごした。

彼は、ニンジンのグラッセだけ丁寧に除けて、それ以外をすべて平らげた。

「映画と料理は似ている」とナプキンを握った彼の手のひら。

そこには黒いインクで文字が書かれていた。

〈セックスと料理は似ている。〉

「私たち、付き合っているのかな」

十一ヶ月前、南青山のカフェテラス。

少し早めのランチを済ませてカプチーノを飲みながら、私は彼に聞いた。

彼はストロベリーパフェを平らげて、無邪気な子供のように口元に生クリームをつけていた。

「もちろん」と微笑んだ彼の手のひら。

そこには黒いインクで文字が書かれていた。

へ（笑）く

「その手のひらの文字は何？」

十ヶ月前、自由が丘のデザイナーズマンション。

自宅に彼が泊まった夜、私は聞いた。

はじめてアナタと出会ったときからずっと気になっていたの、と。

「これがボクの仕事さ」と微笑んだ彼の手のひら。

そこには黒いインクで文字が書かれていた。

〈LOVE & PECE〉



「休みが取れたら、温泉に行こう」

九ヶ月前、西新宿のプリンスホテル。

彼は嬉しそうに呟いて、私が答えるより先にキスをした。

彼とは何度も食事をして、セックスも十二回した。

「おなかの贅肉を見られたくない」と照明のつまみを握った彼の手のひら。

そこには黒いインクで文字が書かれていた。

〈13〉

「UFOを見たことがあるかい？」

八ヶ月前、鬼怒川の温泉旅館。

旅行二日目の夜、彼は部屋の窓から空を見上げて呟いた。

そして、私が答えるより先にキスをした。

「おなかの贅肉を見られたくない」と照明のつまみを握った彼の手のひら。

そこには黒いインクで文字が書かれていた。

〈55〉

「パーティーに着いてきてくれない？」

七ヶ月前、自由が丘のデザイナーズマンション。

親友のケイコから電話が来て、あまり気は乗らなかつたけれどパーティーに行くことになった。会場の入り口で仮面が支給され、着用品が義務付けられた。

「さあ、諸君！洋服という名のジレンマを脱ぎ去ろう！」と仮面を被った全裸の主催者の手のひら。

そこには黒いインクで文字が書かれていた。

〈ドレスコードは生殖器。〉

「昨日の夜、恐ろしい夢をみたの」

七ヶ月前、自由が丘のデザイナーズマンション。

私は彼に、とても奇妙で、とてもいやらしい夢の話をした。

彼は黙って最後まで聞くと、それをすべて包み込んでしまうような意味深な笑みを浮かべた。

何も言わず、私を胸に抱いてくれた彼の手のひら。

そこには黒いインクで文字が書かれていた。

〈ドレスコードは生殖器。〉

「私、あなたのことがよくわからない」

六ヶ月前、南青山のカフェテラス。

少し遅めのランチを済ませてカプチーノを飲みながら、私は彼に別れ話を持ちかけた。彼はストロベリーパフェを平らげて、バカみたいに口元に生クリームをつけていた。

「やれやれ」とバカみたいに薄ら笑いを浮かべた彼の手のひら。

そこには黒いインクで文字が書かれていた。

へさようなら。または、こんにちは。く

数日後、男のスーツカー行為が始まった。そして私は、全身の毛穴から反吐が吹き出るような日常を強いられることになった。皮肉にも、異常なほど狂おしい恋愛をしたときのように、男の幻影は四六時中、私の脳の中でその一部になっていった。

妙な言い方だが、男はスーツカーの才能があった。天才的なスーツカーだった。コピーライターという職業柄ということなのかもしれないが、兎に角、へんに感心してしまうほど、私が嫌がるありとあらゆる行為を男は魔法のように行った。

警察は取り合ってくれなかった。探偵社は大金だけせしめて、何の成果も残さなかった。何でも屋は、何時も音信不通だった。そして、半年が過ぎた。

仕事場から帰宅すると、スヌーピーとウッドストックの描かれた掛け時計は午後11時42分を指していた。シャワーは浴びず、ミッキーマウスの大きめのTシャツに着替えて、テレビの電源を入れて、一番くだらなさそうな番組をつけた。テレビからの笑い声を聞くだけで、なんとなく安心出来ることを知って、ここ数日は意味もなく、その手のバラエティ番組をつけるのが習慣になっていた。

ケイコに電話をしようと思っていた。例の仮面パーティーの一件で変な別れ方をしてしまい、暗黙の了解的にお互い連絡が出来ない状況が続いていた。本来なら、警察よりも、探偵社よりも、何でも屋よりも、真つ先に連絡するべきだったと後悔もしていた。携帯電話の着信履歴にはわけの分からない電話番号がアメリカ海軍のパレードのように並んでいて、リダイヤルの一番上にはケイコの名前が表示されていた。私は通話ボタンを押した。

「だったら、アタシの部屋に来ればいいよ」これまでのことを一通り話すとケイコはそう言った。「今日はもう遅いから、明日から暫くのあいだ、アタシの部屋に泊まればいい」

あの男の存在に対する私の中の緊張が、ケイコの優しさに飲み込まれていくみたいに消えていった。もつとも、ケイコの第一声は一番くだらないバラエティ番組を見ていましたと言わんばかりの笑い声の入り混じった声だったが。

電話を切ったときには、そのくだらない番組は終わっていた。私はテレビをつけたままにしてベッドに入った。テレビから流れる音を聞きながら目をつむった。通販の番組がやっていて、しばらくするとコマーシャルになった。年老いた夫婦が出てくるダイヤモンドか何かのコマーシャルのようだった。妻の誕生日をうっかり忘れてしまっていると思われる夫が、こっそりと指輪のプレゼントを用意しているというストーリーだった。最後にナレーションのように夫のセリフが入った。

「あと何回、妻を祝えるのだろうか…またひとつ、死に近づいている。」  
私は眠りに落ちた。

彼女は目を覚ます。楽しい夢を見ていた。あるいは恐ろしい夢を見ていた。あるいは卑猥な夢を見ていた。あるいは何の夢も見えていなかった。テレビには砂嵐が映っている。カーテンが風に揺れている。ベランダの窓が開いている。コピーライターが立っている。それを視覚的に認識した瞬間、彼女は脳味噌に鳥肌が立ったような感覚を覚える。悲鳴を上げそうになったが、悲鳴の方が上がることを拒絶するように、どう頑張っても悲鳴は出ない。

「こんにちは」と言って、コピーライターが部屋に入ってくる。

彼女は本能的にベッドから立ち上がる。ベッドが微かに軋み、内蔵されたスプリングが唸り声のような音を響かせる。ベッドから離れた彼女の白い足が片付け忘れていた週刊誌を踏み込むと、その週刊誌は彼女ごとフロアリングの床を一センチメートルほどスライドした。そして表紙一枚を破くには十分過ぎる彼女の体重が、地球上の物理法則をおよそ尊重するかのようになつてそれを乱暴に破いて、彼女は体制を崩した。悪戯好きの子犬に噛み千切られたような表紙は、脂汗にまみれた彼女の足の裏に引つ付いた。今週号のアンアン。白地の表紙は美しい男性モデルの際どいセミアード写真で、その上にピンクの見出しが並んでいた。へ女性のためのSEX特集―SEXと料理は似ている？―彼女が完全に倒れこむと、それは足の裏から剥がれ落ちた。

コピーライターがゆっくりと近づいて来る。うつ伏せに倒れた彼女が状態を起こし終えた頃、すでにコピーライターは目の前にいて、最初からそこにあつた冷蔵庫のようにそびえ立っていた。テレビに流れる砂嵐がコピーライターの全身を浮かび上がらせ、今にも冷蔵庫特有のモーター音を響かせそうだった。

彼女は背中越しに設置されていたラックの上にダーツの矢を見つけると、まるで崖から転落しそうなときに差し伸べられた手をつかむかのように、無我夢中でそれを握り取ってコピーライターの心臓に突き刺した。

コピーライターは即死した。

私が今起こったことを理解出来たのは、時計の長針が二周半ほど回つたあとだった。テレビでは、朝のニュース番組が始まつていた。「おはようございます」というアナウンサーの声が目が覚めた、そんな感覚だった。もしも、アナウンサーが挨拶なしにニュースを読み出していたら、まだ暫くその屍の前で立ちすくんでいたかもしれない、と私は思った。私はどうしようもなくなくなり、またケイコに電話を掛け、今起こったことを一通り話して助けを求めた。

「すぐに行くよ」とケイコは答えてくれた。

私は念のため男の死体に、クローゼットに閉まつていた、いまは使っていないオフホワイトのシーツを掛けてから、マンションの前でケイコを待った。空はまだ薄暗い。まだ太陽が昇りきっていないのか、あるいは、ただ単に曇っているだけかもしれない。野良猫がゴミ捨て場の前を徘徊している。すでに本日の収穫を口に啜えている。猫は私の存在を感じて、こつちを振り向く。私はつい目をそらしてしまう。電線にカラスが二羽止まつている。親子か、あるいは友だちか、あるいは恋人同士か、あるいは赤のタニンかもしれない。次に電線に目をやると、すでに一羽のカラスが飛び立つたあとだった。

ケイコが乗ったフィアット500が現れると、野良猫は建物と建物のあいだに吸い込まれるように入っていった。ケイコはフィアット500をマンションの前に停車して、エンジンを切ってハザードランプを付けた。そして、運転席のドアから出てきて言った。

「アタシもいけなかったんだよ、なんだって夜のうちに迎えに来なかったんだろう」

ケイコは、フレッドペリーのジャージを着ていて、アディダスの原色のスニーカーを履いていて、キャップを深く被っていた。キャップにはアメリカのアニメ映画から飛び出てきたような犬のキャラクターと「LOVE & PECE」というロゴのワッペンが刺繍されていた。

太陽が昇っていた。

「さて、こいつを埋めに行こうか」私の部屋に入って、ケイコは言った。「二人なら運び出せるよ」

シーツはコピーライターの形をしている。それは紛れもなく、コピーライターの形をしている。オフホワイトのシーツにまるでダイニングメッセージのように滲み出した血の赤がその男の死を象徴した。

「いつせいのせ」と声を合わせて、私とケイコがコピーライターを持ち上げるとシーツが捲れた。男の手のひらが不意に目に入った。

そこには黒いインクの文字は書かれていなかった。

とつても素敵なキャッチコピーだ、と私は思った。